

平成 30 年 5 月 22 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370203

研究課題名(和文) 加賀藩を事例とする近世能楽史の地方展開についての研究

研究課題名(英文) Research of the modern history of Nohgaku in the domain of Kaga

研究代表者

西村 聡 (Nishimura, Satoshi)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：00131269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：金沢市立玉川図書館並びに前田土佐守家資料館所蔵の能楽関連資料を調査・収集し、その成果を展示解説の形でまとめて公開した。加賀藩中期の能楽事情について『太梁公日記』の記事を大量に抜き出し、従来の能楽史記述にない詳細さで把握した。加賀藩で著述された謡曲注釈書『謡曲義解』の内、「卒都婆小町」分を翻刻し、解題を付した。近世から近代への過渡期の非体制的能楽である照葉狂言、今様能狂言について、『照葉俄早合点』を翻刻し、解題を付した。それらの資料研究を踏まえて、能「卒都婆小町」「芭蕉」の作品研究を、また泉鏡花の小説「笈摺草紙」「照葉狂言」の作品研究を論文化し、通説の検証と新しい読みの提案を行った。

研究成果の概要(英文)：I investigated and collected the Nohgaku documents of Libraries of Kanazawa City and Maeda Tosanokami-ke Shiryokan Museum and showed results of research in the form of the display commentaries. I pulled out articles about the Nohgaku from Tairyō-ki Nikki in large quantities and elucidated Nohgaku circumstances in the middle of the Kaga feudal clan era in detail. I reprinted and commented on Noh play Sotoba-komachi of Yokyoku-gige written in the domain of Kaga and Teriha-niwaka-hayagaten. I wrote articles on the Noh play Sotoba-komachi, Noh play Bashō and Oizuru-zoshi and Teriha-kyōgen written by Kyōka Izumi.

研究分野：人文学

キーワード：能楽 近世 加賀藩 地方 照葉狂言 今様能狂言 泉鏡花 太梁公日記

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 能楽史研究の対象は、時代が中世から近世・近代へ、地域が中央から地方へ拡大し、かつ時代間の継承や地域間の交流を見比べる方向にある。江戸幕府の統制下の能楽を主体としつつ、上方や諸藩にも周到な目配りをした通史記述や、江戸城の催しの記録の整備が進み、能楽学会の機関誌『能と狂言』7号(2009)で“江戸時代の能楽”が特集されたことをはじめ、地域や時期ごとの個別研究の成果を比較し、集成することで、従来の近世能楽史記述を更新しようとする流れがさらに鮮明になってきている。

(2) しかし、能楽は幕藩体制下の式楽であり、徳川幕府の江戸城だけでなく、藩ごとに江戸の藩邸でも国元でも、催能は頻繁に行われたから、それらを記録した資料は膨大な量に上り、その全体像の把握と解明には、今後も時間をかけて新しい資料の発掘に努め、既出の資料の分析に正確を期し、能楽史記述を絶えず補正してゆく必要がある。本研究の対象とする加賀藩については、早くに地方能楽史記述の先駆的業績と評価できる『石川県史第二編』(1928)や『稿本金沢市史風俗編第二』(1929)が刊行され、梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』(1972)の存在も広く知られている。それらの通史記述が可能であったのは、金沢市立玉川図書館近世史料館の加越能文庫・藤本文庫等に能楽関連資料が豊富に伝存していることや、『加賀藩史料』(1929~1942)の編纂成果によるところが大きい。

(3) 本研究の研究代表者も、それらの先行研究を踏まえつつ、『金沢市立図書館蔵謡言粗志 翻刻と校異』上下(1989・1990)、『加賀藩御細工所の研究』(二)(1993)、『金沢市史資料編 15 学芸』(2001)、『金沢市史通史編 2 近世』(2005)、『大鼓役者の家と芸 金沢・飯島家十代の歴史』(2005)などの共編著者の一人として、能楽関連資料の収集と考察に努めてきた。

(4) さらに近年は、『金沢市図書館叢書』(1996~)・『史料纂集 大梁公日記』(2004~)・『大野木克寛日記』(2011)等、『加賀藩史料』を補完する資料集・記録類の刊行も順調に行われ、能楽に関しても多くの新事実が明らかになってきている。

(6) 本研究は、こうした大量の新資料を活用して、能楽の式楽的性格を越えた階層的な広がりや、従来の通史記述には欠落しがちであった江戸や京都の加賀藩催能や能楽事情も視野に入れて、資料の再編と通史記述の見直しを図るものであり、近世能楽史の地方展開に関する先端的な研究に位置づけられる。

## 2. 研究の目的

(1) 近世能楽史の地方における展開を、加賀藩を事例として、新出資料を活用しながら、また江戸や京都の能楽事情も視野に入れて、複線的・双方向的に解明することを研究目的とする。近世能楽史は藩ごとの地方能楽史を

集成するだけでなく、江戸の藩邸や京都屋敷における諸藩の催能に大夫やその周辺の中核的役者がどう関わるかを確かめることなしには、その全体を把握したことになる。そして藩ごとの式楽的な催能には記録が残るにしても、中級藩士や町人による日常的な親しみの様子は、番組の収集だけではとらえ切れない。幸い加賀藩を事例とすれば、従来の研究で欠落しがちであったこれらの問題を解決する資料が豊富にあり、依拠資料を補正・充実させた新しい能楽史記述に到達することが可能と見て、そのための基礎的研究を目的に掲げた。

(2) 本研究が継承した前年度までの研究課題「近代宝生流能楽史の地方展開」においては、これまで詳細な流儀史を持たない宝生流の近現代を家元九郎知栄とその周辺の重鎮たちの活動を通して解明すべく研究計画を実施してきたが、九郎の先代紫雪時代との接続を視野に入れる必要があることや、この間並行して実施してきた加賀藩能楽史の研究についても、前頁記載の共編著類に加えて、従来の空白を埋める江戸藩邸の御能成・後宴能への着眼(西村聡「加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組」2009)や、最近翻刻が完成した『大野木克寛日記』の活用(西村聡「『大野木克寛日記』から見た加賀藩中期の能楽」2011)等により、具体的な研究成果が蓄積できてきたので、近現代能楽史に関する部分を著書にまとめる準備を進めながら、加賀藩を事例とする近世能楽史の地方展開に関する研究を、さらに新しい視点と新しい資料により充実させることを着想するに至った。

## 3. 研究の方法

(1) 加賀藩能楽史研究の基本資料となる番組類や関連史料を調査・収集し、系統的に整理するとともに、重要なものから翻刻して活用方法を探ることは長年継続して行ってきた。本研究では金沢市立玉川図書館近世史料館及び前田土佐守家資料館の所蔵資料を対象とし、許可を得て大量に写真撮影することができた。金沢市立玉川図書館近世史料館では、これまで調査・収集してきた番組類以外の資料に視野を拡大して実施した結果、新たな研究対象が浮かび上がってきた。また前田土佐守家資料館では、所蔵品目録に従って必要な書類を網羅的に調査・収集し、加賀藩主前田家に次ぐ重臣家(いわゆる加賀八家)での能楽への関わりを具体的に解明する資料的な基盤を整備することができた。

(2) 調査・収集した資料を系統的に整理することは金沢市立玉川図書館近世史料館の展示解説の形で実現し、公表することができたが、それらの中から、また自ら入手した資料の中から、重要かつ分量のまとまったものを翻刻し、解題を付すことを行った。稼堂文庫蔵『謡曲義解』内「卒都婆小町」や金沢大学蔵『照葉俄早合点』の翻刻・解題がそれに該当する。この作業は今後も継続してゆくつ

もりである。

(3) 加賀藩能楽史を記述する上で基本資料となる文献に『加賀藩史料』がある。この文献から能楽関連記事を抜き出して年表化することはすでに2回実施して正確を期しているが、『加賀藩史料』に掲載されていない資料や掲載に当たり抜粋が行われている資料に関しては、直接それらに当たり記事を探すことが必要となる。本研究では近年、活字翻刻が公刊され続けている前田治脩の日記『太梁公日記』の中に能楽記事を探索する作業を行い、その結果を踏まえて明和末・安永初期の能楽事情を詳細に把握することができた。この作業も今後継続してゆくことになる。

(4) 本研究の研究代表者は日本文学(中世文学)が専門であり、上記の資料に基づく能楽史の更新をめざしつつ、その一方で、文学研究としての魅力の発見も交えてゆければ、歴史記述に特色を出せるものと考えている。そのためにも能や狂言の作品研究を並行して行うことを続けてきた。歴史と文学の、また中世と近世・近代の、それぞれ両方を視野に入れることを意識し、「芭蕉」「井筒」の比較文学的考察や泉鏡花の小説に、従来とは異なる視点で新しい解釈を打ち出した。単に詞章や演出の変遷や時代背景の反映を見るだけでなく、能や狂言の作品理解を踏まえることで、通説とは異なる理解が可能になったと考える。

#### 4. 研究成果

(1) 金沢市立玉川図書館近世史料館において加越能文庫・藤本文庫等の所蔵資料の調査・収集を実施し、その成果を同館の平成26年度秋季展「そして能は広がる。」「謡曲・能楽」の定義と金沢」(中世文学会との共同企画)の展示解説の形で来館者に公開・配布した。その過程で、本研究でめざしていた番組類の史料とは別に、「謡曲正謬」「国楽譜」等の謡曲関係文献の存在が新たな研究対象として浮上してきた。また、番組類も多数、調査・収集することができた。展示解説書は全16頁、「1.「謡曲」と書いて「ヨウキョク」と読むのはいつ頃からか」、「2. 謡曲注釈の系譜と加賀藩」、「3.「謡曲・能楽」の様々な異称」、「4.「能楽」の提唱と金沢におけるその定着」、「5. 近代の謡曲研究と謡曲の新作」から成る。

(2) 前田土佐守家資料館所蔵の資料についても調査・収集を実施して、従来は藩主中心に記述されてきた加賀藩能楽史を、重臣の関与の実態を解明することにより再構築する可能性に手応えが得られた。

(3) これらの研究は平成25年度まで実施してきた「近代宝生流能楽史の地方展開」を発展的に継承するものであり、上記の資料には近代分も少なからず含まれる。その中で、近世から近代への過渡期の非体制的能楽である照葉狂言・今様能狂言について、安政2

年刊の『照葉俄早合点』を入手して、翻刻と解題を『金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇』第7号に発表した。挿絵部分の分析も交えたことで、従来よりも照葉狂言の特徴が鮮明に把握できるようになった。分析に当たっては、法政大学能楽研究所鴻山文庫所蔵資料も調査・収集して活用した。

(4) 加賀藩で著述された謡曲注釈書『謡曲義解』(金沢市立玉川図書館近世史料館稼堂文庫蔵)6冊11番の内、第5冊「卒都婆小町」の翻刻を行い、その最も大きな特徴である鈴木正三作「面影小町」、『謡曲義解』の著者による改作「有明小町」を、それぞれ原作と比較して、それぞれの主張を明確に把握する考察を行った。二つの改作は原作本来の主題を解さず、継承しない改作と言えるが、原作の主題論を見直す視点を提供するところに『謡曲義解』の注釈史上の存在意義が認められるとした。その具体的な考察を解題として付し、翻刻を『金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇』第8号に発表した。従来、名前のみは知られていたが、その内容に踏み込んだ考察や翻刻本文の提供は初めてのことである。

(5) 泉鏡花の小説『笈摺草紙』について、その虚構が従来指摘される史実、金春金之丞のモデルが中田万三郎であり、加賀藩主前田慶寧の卯辰山開拓に重ねた鏡花のファミリーロマンスであるとの読み方を検討し、金春金之丞に近い人物は金春伝蔵であり、浜の摩耶寺は松任の行善寺ではなく親不知近くの浜であるべきこと、その親不知近くの寺で少年が親を知らないことに意味があり、小説の城下や三次郎の蓑岡山開拓とのむしろ相違点に注目すべきことを論証して、『紫明』誌に発表した。

(6) 加賀藩中期、明和末・安永初期の能楽事情について、近年公刊の進む前田治脩の日記『太梁公日記』の記事に基づき、従来は能楽記事自体が3件(いずれも江戸の加賀藩邸)しか知られなかったところを、金沢城での催能を含めて、大量の記事を抜き出して詳細を明らかにした。特に藩主が重教から治脩へ交代する時期に当たるため、藩主の心得がどう継承されるかが具体的に解明できた。治脩は重教に重教の演能の「拝見」を命ぜられ、次には重教の前で治脩が演能をする。その過程の稽古の様子や役者・道具類の手配、幕府との関係で重要な老中招請能の準備が具体的に把握できた(論文を桂書房刊『加賀藩研究を切り拓く』に発表した)。今後、『太梁公日記』の公刊が進むにつれて、さらに多くの事実が見えてくるはずであり、研究の継続・発展が期待される。

(7) 泉鏡花の小説『照葉狂言』について、明治維新を含む時期の非体制的能楽の変遷を山本春三郎や林小親の動向に注目し、新たな関係資料(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵「尾山神社今様能狂言番付」)から詳細に解明した上で、作品の評価を転換させる提案

を論文化して、『金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇』第9号に発表した。【要旨】泉鏡花作『照葉狂言』を読む時には、物語前半と物語後半の二つの現在に加えて、主人公が語り手を務める現在を視野に収める必要がある。従来、主人公の貢は物語前半から八年を経て成長が見られない、あるいは良くない方向に変化した、と物語後半の貢には否定的な論評がなされてきた。しかし、物語後半の貢は心身ともに成長していることを、周囲の人物も認め、当人も自覚している。貢は成長しているからこそ、一座を離れなければならなかった。貢は貢を愛する人々母や雪や小親と別れて、別れるたびに生きる力を鍛えてゆく。その到達点が物語を語る地の文の水準（書き言葉の語り）であり、その前に語る言葉を獲得する段階を経て来ている。その時々には周辺人物たちの様々な語りや影響している。貢が語る物語が『照葉狂言』と題される理由については、実在の小親が属した一座の興行には「照葉狂言」を含む様々な呼称が使用されたが、小親も芸能としての「照葉狂言」も、小説の発表された当時には忘れられかけていて、それゆえにこそ懐かしい故郷や少年期、夢のような思い出を象徴する言葉たり得たこと、また「照葉狂言」には雪の結ぶ青楓の「照葉」や一座で貢が演じた「狂言」の意味も込められていることを明らかにした。通説のように物語の題が芸能名や座名に由来すると見るのでは、物語を小親の物語に矮小化することになる。従来不可解とされる結末も、貢の成長と小親の病気というそれぞれの身体の変化が、互いに今を甘え合うことの限界に気づかせた結果であり、かつて貢は雪との間でできたこと（別れ）を、今度は小親との間でしなければならぬ。山の端から貢が告げる言葉は、貢自身も含めて「彼処にある者」たちに向けて発せられた。貢は彼らの織りなす物語世界を『照葉狂言』と題して語る、未来の語り手への一歩を踏み出したと言える。

(8) 近世・近代の能楽史を踏まえた作品研究として、「芭蕉葉の夢は破れる その比較文学的考察から夢幻能の再検討に及ぶ」(三弥井書店刊『文学 海を渡る 越境と変容 の新展開』)及び「卒都婆小町の未来 壮衰の因果を超えて」(金沢大学人文学類『言語文化の越境、接触による変容と普遍性に関する比較研究』)を発表し、それぞれ具体的に新しい解釈を示した。【要旨】植物の芭蕉が境界を越えていつ頃日本に渡り、根付いたかは分からない。実物に親しむより早く、日本古典文学は漢訳仏典や漢詩文を介して、その葉が風雨に破れやすいことから芭蕉を無常の象徴と見なす中国の伝統を受容してきた。その過程では和歌的な表現の規範が確立するだけでなく、無常の喩の様々な読みかえや書きかえが行われる。やがて実物に親しみ、観察が行き届くと、巻き葉の空疎な構造やむしろ盛んな生命力に関心が向き、そ

の葉が作る緑陰や立てる雨音が新たに五山詩や絵画の題材となる。従来、中世の絵巻・絵本では画面に芭蕉を描くことで異界性・異国性を強調するとされたが、加えて僧の見る夢が破れたり、女御の喜びが絵空事となるなど、物語の重要な転機を予感させる意図も認められる。さらに、こうした芭蕉に関する知識を踏まえ集成した作品が能 芭蕉 である。そこでは王摩詰の「雪中芭蕉」と『列子』の「蕉鹿の夢」の二つの漢故事が利用され、これらはともに仏教出自の故事ではないのに、ワキ僧が法華経読誦に励んだあかしの奇特を見るという主題(新たな物語)のために、仏教的に改変・脚色されている。この 芭蕉 と 芭蕉 に影響を与えた 井筒 を、結末の表現やアイ語りに注目して比較すると、能が《物語》からどのように離陸し、《劇》の文章を作り上げていったかという問題や、前場にさかのぼる夢の連続性、救済と靈験の関係など、従来の夢幻能の定義を見直す視点が得られる。

(9) 大蔵流大蔵弥右衛門家と和泉流野村万蔵家に関する解説(狂言会パンフレット)を執筆し、金沢を舞台とする近代狂言史の地方展開の中で、昭和20年代以前には、現代と異なり、大蔵流の諸家が金沢で活動していた事実を確認した。

(10) 本研究期間中、その成果は金沢能楽美術館の連続講座や石川県立能楽堂・国立能楽堂の演能解説、金沢大学人文学類の公開シンポジウム・公開研究会等で広く社会に還元している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計4件)

西村 聡、『照葉狂言』を語る未来 一座を越えて行く身体、金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇、査読無、9号、2017、pp.1-16、DOI:1883-521X

西村 聡、『謡曲義解』五「卒都婆小町」翻刻と解題、金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇、査読無、8号、2016、pp.1-24、DOI:1883-521X

西村 聡、亡き母を慕う未来 泉鏡花『笈摺草紙』の虚構と史実、紫明、査読無、38号、2016、pp.70-73

西村 聡、安政二年刊『照葉俄早合点二編』 解題と翻刻、金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇、査読無、7号、2015、pp.1-20、DOI:1883-521X

### 〔学会発表〕(計0件)

### 〔図書〕(計3件)

西村 聡 他、金沢大学人文学類、言語文化の越境、接触による変容と普遍性に関する比較研究、2017、138(pp.121-130)

西村 聡 他、三弥井書店、文学 海を渡る 越境と変容 の新展開、2016、277 (pp.15-65)  
西村 聡 他、桂書房、加賀藩研究を切り拓く、2016、413 (pp.249-258)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 聡 (NISHIMURA Satoshi)  
金沢大学・歴史言語文化学系・教授  
研究者番号：00131269

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )